

神奈川県高等学校教科研究会 社会科部会報

2013 (平成25) 年5月22日発行

〔第72号〕

社会科部会事業報告・決算報告・予算案 2～3
 社会科部会実施事業・事業計画案 …… 4～7
 秋季研究大会講演趣旨 青山 亨氏 …… 8～10
 各分科会報告・等 …… 10～17

事務局 神奈川県立新城高等学校
 岡崎 恭一
 〒211-0042 川崎市中原区下新城1-14-1
 TEL 044-766-7456 FAX 044-752-7812

100

平成25 (2013) 年度社会科部会春季研究大会および講演会

1 日 時 平成25 (2013) 年5月22日 (水) 9:00～16:00

2 会 場 かながわ県民センター (大ホール)
 横浜市神奈川区鶴屋町2-24-2 (TEL 045-312-1121)

3 時 程 9:30～10:00 受付、資料配布 (名簿・部会報・研究報告などの配布)
 10:00～12:00 分科会発表及び協議
 総合司会 澤野 理 (県立大師高校)
 開会のことば
 部会長挨拶 岡田 健 (県立菅高校校長)
 (10:10～) 研究発表

○歴史分科会「2012年度史跡調査報告と教材化の視点」

丸山 理 (県立湘南高校・定)

○地理分科会「秋季野外調査の教材化 ～厚木・海老名を事例に～」

山本 大 (県立生田高校)

○倫政分科会「自己表現から学ぶ倫理」

藤井 光葉 (県立三浦臨海高校)

12:00～13:30 昼食・休憩

13:30～13:40 広報活動

13:40～16:00 講演会

16:00 閉会のことば

4 講演内容

○【講師】 井上 達夫 先生 (東京大学大学院法学政治学研究科教授)

○【演題】 『世界正義について考える』

<講師プロフィール> 井上 達夫 (いのうえ たつお) 先生

1954年 大阪生まれ。

1977年 東京大学法学部卒業。現在、東京大学大学院法学政治学研究科教授。法哲学専攻。

主な著書 『共生の作法－会話としての正義』 (創文社)

『他者への自由－公共性の哲学としてのリベラリズム』 (創文社)

『現代の貧困－リベラリズムの日本社会論』 (岩波書店)

『普遍の再生』 (岩波書店)、『法という企て』 (東京大学出版会)

『自由論－哲学塾』 (岩波書店)、『世界正義論』 (筑摩書房)

共著 『現代哲学の冒険 (13) 制度と自由』 (岩波書店)

『共生への冒険』 (朝日新聞社)

2012年度秋季研究大会講演会要旨

仏教の展開から見た古代東南アジア — 5世紀～9世紀 —

東京外国語大学大学院総合国際学研究院
教授 青山亨先生
(2012年10月24日 於 かながわ県民センター)

はじめに

なぜ5世紀から9世紀の東南アジアなのか。それは、ここを見ていくことで、南伝仏教・小乗仏教・上座部仏教といった概念を歴史的にどう整理して理解すればいいかわかるからです。それからインドネシアのボロボドゥールは、一体どのように位置づけて理解する、あるいは生徒たちに教えるか。仏教東漸の中で、東南アジアと東アジアはどう結びついていくのかということを考えたいと思います。



1. 義浄による東南アジアの記録

まず7世紀から話を始めていきたいと思います。隋から唐の時代です。玄奘、そして義浄の2人がインドに行って仏典を中国に持ち帰るといって、非常に重要な時期です。義浄はインドに行くにあたって、行きと帰りともに東南アジアの島嶼部を通っているのです。義浄の記録は、中国の仏教僧の目から見たという条件がつきますが、当時の東南アジアの状況を非常に詳しく記録しています。

義浄の証言によれば、中国の西の国々では大乘と小乗は共存し、対立していない。大乘や小乗という区別は、中国人が細かくしているだけで、実際の東南アジア・インドの世界では、この区別は曖昧であると言っています。

さて、この頃の東南アジアではどんな人物が仏

教の活動をやっていたのか。7世紀の麟徳年間に、ジャワ出身の若那跋陀羅は、中国僧の会寧と阿陵（ジャワ周辺にあった国）で出会って、協力して『大般涅槃経後分』を漢訳しました。未翻訳の『後分』を翻訳したという、非常に重要な貢献をしている人物です。サンスクリット語から漢文中国語に翻訳する作業を、会寧という有名な中国僧と協力してやっています。

さらに、ベトナム北部出身のマハーヤーナプラティーパは、ドゥヴァラパティー（現在のタイのチャオプラヤ川の下流）で唐の使いと一緒に長安に至り、玄奘に具足戒を授けられて正式僧となっている。そこから海路で師子国（スリランカ）を経て、タームラプティ（インドのガンジス川下流域の港町）で義浄と出会って、インド中部を巡礼して回りました。

2. 仏教の展開

まず釈迦様とその弟子たちの時代に成立した初期仏教が、根本分裂をおこします。上座部系の部派と大衆部系の部派です。そして、それぞれが上座部系の方からさらに細かく、いわゆる上座部、それから説一切有部、正量部といったものに分かれていきます。玄奘が記録しているのはこの4つです。大衆部系の代表としては、大衆部が挙がっています。上座部系の代表としては、上座部、説一切有部、正量部の3つの部派が挙がっている。これを部派仏教と総称しています。この中から大乘仏教というものがあるわけですが、実は大乘仏教の起源というのは現在でも完全にはわかっていません。

それから、大乘仏教のなかからは、さらに密教というものが生まれてきます。したがって、5世紀から9世紀の仏教世界というのは、東南アジアも含めて、西はインド、東は中国、一部日本までの広い仏教世界があり、つながっていたわけです。言い換えれば、5世紀～9世紀というのは、ほぼ仏教というのがフルセットで展開していた時期ということが言えると思います。

3. 仏僧往来の記録

ここで5世紀にさかのぼります。中国の南北朝時代で、南朝も仏教の中では重要な働きをしています。ここで挙げたいのは、法顕、グナヴァルマ

ン、グナヴァドゥラーの3人の仏教僧です。この時期、インド史のグプタ朝は、320年から550年の頃に北インドで栄えた王国で、サンスクリットを公用語にしました。しかし、これに対抗する動きがありました。ブッダモーサという仏教僧は、5世紀に上座部が非常に盛んだったスリランカに来て、パーリ語で論書、仏教經典の解釈書を書きます。つまり、インド本土はサンスクリットが共通語化していくなかで、あたかも対抗するようにスリランカでは少なくとも仏教徒はパーリ語を使うという別の道を選んでいった。そこに中国からお坊さんが行っている、という状況なのです。

まず南朝東晋の僧法顕です。法顕によれば、5世紀の早い段階は、東南アジア島嶼部ではヒンドゥー教がけっこう栄えていたようです。

次に、グナヴァルマンです。師子国（スリランカ）に渡り、さらに東南アジアのジャワにやってきました。424年になると、グナヴァルマンの名声が中国にも伝わり、南朝の宋の文帝の招きで、431年南朝の都建業に至りました。

さらに、もともとはバラモン出身だったグナヴァドゥラーです。彼はスリランカを経て、帰りは435年広州（広東）にやってきました、というふうに記録されています。したがって、大乘と小乗の間に人の行き来、あるいはバラモン教とヒンドゥー教と仏教の間の人の行き来というものがあったということをグナヴァドゥラーのケースは我々に教えてくれます。

4. 東南アジアの「インド化」

5世紀の時代から、東南アジアはサンスクリットを中心としたインド化がおこっていきます。そのなかで、最初はヒンドゥー教の方が少し先行していたことが法顕の記録からわかります。

6世紀になると、扶南国の僧たちが続々と南朝にやってきます。つまり、扶南が東南アジアの仏教先進地域だということが記録されています。そして、インド・中国両方との交流が盛んでした。現に、南朝の梁の都建康には、扶南館という建物があり、扶南のお坊さんがそこに集まって訳経に従事していたということがわかります。

ただ、この扶南は7世紀前半になるとヒンドゥー教を奉じる真臘（のちのカンボジア・クメール、アンコールワットを造っていく王朝）に

よって滅ぼされ、仏教世界からは後退していきます。

義浄が出てきた7世紀を飛ばして8世紀になると、新しい展開がおこります。一番大きな展開は密教の登場です。金剛智・不空金剛・仏哲・弁弘の4人が中国における密教の布教と日本の空海と関係が深い。752年、仏哲は東大寺の大仏開眼供養会で演じられた能楽の指導を行っています。

東南アジアの歴史的な記録は、だいたい5世紀、紀元後400年頃にあらわれてきました。最初期は仏教よりもヒンドゥー教のほうが大きかったということは、ほぼ間違いのないと思います。ところが、7世紀になると、マレー語によるシュリーヴィジャヤの碑文が出てきます。ここからは大乘仏教、しかも密教の教えが東南アジアにすでに定着していたということがわかります。次に8世紀のジャワ島です。732年の一番古い碑文ではサンスクリットで書かれ、ヒンドゥー教ですが、778年になると、仏教とくに大乘仏教、もっといえば密教がジャワ島に普及してきたということがわかります。そして、9世紀のナランダー銅版碑文によって、インドと東南アジアのなかで王様同士のコミュニケーションがあって、今でいう国際協力、国際連携が行われていたということがわかります。つまり、東南アジアのインド化において、最初期はヒンドゥー教が有力でした。ただ8世紀・9世紀というのは、東南アジアでも大乘仏教が極めて隆盛していたということがみてとれます。

5. ボロブドゥール仏教寺院

最後の締めくくりは、9世紀のボロブドゥールです。全体として、これが何かというと、実はわかりません。ただ、これはストゥーパの一種だろうと考えられています。ストゥーパの周囲に、木造建築としての金堂や僧院があったのが、それは消えてしまって、いまは石造りのボロブドゥールだけが残っているというのが実際のところだと思います。

ボロブドゥールの碑文には記録がないので、浮彫、仏像、全体の配置構造から、何をあらわしているのか考えなければなりません。ボロブドゥールというのは整理しますと、仏教の発展段階をすべて含む総合性をもっているということがいえま

す。当時の東南アジアの人たちにとって、それまでの仏教の様々な発展段階をすべて包括的に、しかも視覚的に文字を使わないで表現した。これがポロブドゥールであると考えます。9世紀のポロブドゥールというのは、当時の仏教世界のなかでの東南アジアにおける仏教の一つの到達点を示しているといえます。

おわりに

仏教からみた5世紀から9世紀の東南アジアで言えることは、まず上座部から部派仏教、そして大乘仏教、密教と発展してきた仏教が、アジア世界においては南アジア・東南アジア・東アジアにかけて幅広い形態で連続的に展開していたということです。海路という点を考えていくと、東南アジアにはインドと中国をつなぐ重要なチャンネルがありました。それは単なる通過点ではなくて、この東南アジアからも多くの仏教僧を輩出し、重要な貢献を行ってきたのです。以上のように見ていくと、かつて言われていたような、「南伝仏教すなわち小乗仏教」という仏教のあり方ではなく、実は「小乗仏教」という言い方も上座仏教だけを指しているわけではなくて、サンスクリットを使った様々な部派仏教も、当時の中国人から見れば「小乗」という言い方で名づけられていたということがわかってきます。

島嶼部では15世紀以降イスラームが拡大していきます。その変容過程の背景・前段階としては、すくなくとも5世紀から9世紀には東アジアと南インドをつなぐかたちで、東南アジアを含めた仏教世界が非常に大きな意味をもっていたといえるのです。（要約 鎌倉学園高校 神田 基成）

歴史分科会活動報告

日本史研究推進委員会

昨年度も「神奈川における交易・交流—モノを活用した日本史教材」を共同研究テーマとし、活動を続けてまいりました。同一テーマで10年に迫りつつありますが、「神奈川の教材化」を念頭に活動を行う上でこれを超えるテーマは見あたらないというのが我々の共通認識です。活動はそれにとどまらず、日本史の授業実践とそれにかかわる

教材研究全般が共通の関心です。今年度から県立高等学校における日本史の必修化がはじまりました。必修日本史のあり方や、日常の授業実践のヒントを互いに模索し情報交換ができる委員会でありたいと願っています。

活動の柱は、毎月1回の定例会・夏休みに行われる日本史サマーセミナー・夏と冬の踏査・秋と春の研究発表です。

定例会は、各委員の勤務校を会場に毎月1回水曜日に行われます。委員の報告をメインに、サマーセミナーや踏査などのイベントに向けての意見交換および準備が行われます。特に昨年度は、9月の月例会で（恒例になりつつある）鎌倉学園高校風間洋先生の尽力での建長寺見学を、10月には旧陸軍登戸研究所（明治大学平和教育登戸研究所資料館）の見学を行いました。

日本史サマーセミナーは、昨秋発行の部会報（71号）の報告通り、8月22・23の両日に県立柏陽高校で行われました。内容は、「日本の産業革命」（同志社大学・児玉祥一准教授）、「昭和恐慌史」（逗子開成高校・杉山登先生）、「糸の近現代史」（県立柏陽高校・矢野慎一先生）、「松方財政」（県立柏陽高校・渡辺研悟先生）の4本の授業と研究協議でした。近現代の産業経済史に絞った研修を行い、例年以上のたくさんの参加者が得られました。

夏の踏査は8月3・4日。県立柏陽高校矢野慎一先生の案内で、湯河原・足柄方面を歩きました。冬の踏査は1月7日。県立田奈高校長島一浩先生の案内で、こどもの国とその界隈の戦争遺跡（旧陸軍田奈弾薬庫跡）を見学しました。

春季研究発表会は世界史研究推進委員会との共催で3月6日。柏陽高校矢野先生が、「本郷台の歴史—軍用地の返還と再開発」と題し、本郷台周辺の軍用地返還からJR根岸線本郷台駅の開業・県立柏陽高校の創立を切り口に、地域の戦後史を報告しました。

さて、今夏に開催される全歴研神奈川大会では、「さまざまな地域資料をどう授業に取り込むか」「生徒の思考力・判断力をどのように育てるか」の2つのテーマにそれぞれ2本の報告が準備されています。ぜひ、一人でも多くの先生方にご参加いただき、本委員会にも加わっていただければ、これ以上の喜びはありません。委員一同、ご

参加をお待ちしております。

末筆ながら、月例会で会場を提供いただいた各高等学校および明治大学平和教育登戸研究所資料館に対し、この場を借りて感謝申し上げます。

(県立茅ヶ崎高校 中田 稔)

世界史研究推進委員会

2012年度も県立藤沢総合高校・横浜市立みなと総合高校の二校を会場に定例の委員会を開催し、2011年度からの継続となる『世界経済の歴史—グローバル経済史入門』（名古屋大学出版会）の輪読会や研究大会での発表に向けての研修を行いました。2012年度の発表は、次のとおりです。

・秋季研究大会（10月24日）：

「イェドバブネ事件～第2次世界大戦中のポーランド」 福本 淳（栄光学園高等学校）

・春季研究大会（3月6日）

「近代世界システムをどう教えるか」

鈴木 健司（県立七里ヶ浜高等学校）

また、第70号でもご紹介しましたが、2012年4月27日より29日の日程で、梨花女子大学校（韓国・ソウル）にて開催されましたアジア世界史学会（AAWH）では、「19世紀のアジア史をどう教えるか」というテーマのパネルを主宰し、石橋（藤沢総合）・澤野（大師）・神田（鎌倉学園）・柴（桐蔭学園）の4名が、問題提起と研究発表を行いました。

恒例の「高大連携の試み」も、「18世紀のアジアをどう教えるか」をテーマとして8月6日より8日の3日間、栄光学園を会場に開催し、昨年同様、県内外の多くの公立・私立高校、大学関係の先生方にご参加を頂き、非常に有意義な研修を行うことが出来ました。

なお、今年の7月31日より開催される、全歴研神奈川大会では、「近代世界システム論をどう授業に取り込むか」「中央ユーラシア史をどう教えるか」という2つのテーマについて本県から各2名の報告がなされる予定です。

諸先生方におかせられましては、校務ご多忙の折とは存じますが、今後とも研究大会並びに社会科部会各委員会、また全歴研大会への参加をよろしく願いたします。

(県立寒川高校 根岸 洋史)

史跡踏査委員会

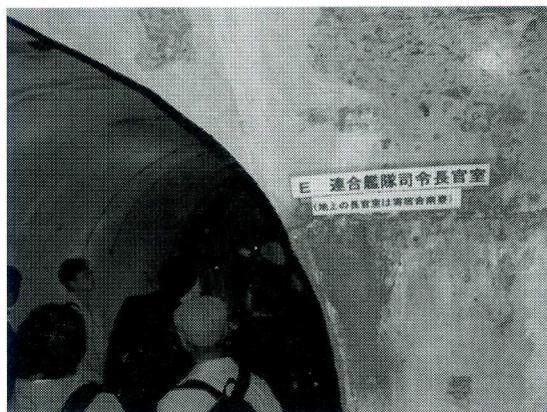
第47回秋季県内史跡踏査報告

実施日：2012年11月7日（水）

踏査地：川崎市幸区・横浜市港北区(加瀬台・矢上台・日吉台)方面…弥生・古墳時代の
大集落および連合艦隊司令部地下壕

加瀬台東端に位置する南加瀬貝塚を過ぎて台地上にあがり、加瀬台古墳群を見学した。戦没者慰霊塔広場の9号墳は平成3年に発掘調査が行われ、墳丘部の規模が22mほどの周溝と石室を残す円墳であることが判明した。台地西端の8号墳は現在加瀬台・日吉台・矢上台の古墳群中では唯一の方墳であり、周溝から出土した土器より5世紀中葉と推定される。富士見デッキから西側を望むと、矢上川の沖積低地と日吉台・矢上台が見渡せ、加瀬台の延長線上には全長87mの前方後円墳であった白山古墳址が見える。昭和初期の東横線開通と開発を機会として慶應義塾大学により昭和12年に発掘され、木炭塚からは椿井大塚山古墳（京都府）出土と同範鏡である三角縁神獣鏡や、多くの鉄製品・ガラス製品が出土した。多摩川の対岸にある多摩川台古墳群も含めたこの地域の代表的古墳である。また、矢上川の向こう矢上小学校には、かつて前方後円墳の観音松古墳があり、近年の研究によりその規模は100mを超えたと推計されている。

国宝秋草文壺（12世紀）出土地点を過ぎて矢上台へと向かった。慶應義塾大学矢上キャンパス内の文化財調査室では、石神裕之准教授に目下出土品整理作業中の矢上台遺跡について解説していただいた。「もし台地全面を発掘することが出来れば、矢上台だけでも1,000軒以上、日吉台と合わ



地下壕指令長官室表示

せて2,000軒以上が見つかるはず」とのことで、東京湾を介した巨大な物流センターともいえるこの遺跡から出土した多くの遺物を、実際に手に取りながら目にすることが出来た。

午後は慶應義塾大学民族学考古学研究室の安藤広道教授と合流し、校舎内で日吉台・矢上台・加瀬台遺跡発掘の歴史についての講義を受けた。大都市圏多摩川下流域において、これまでの発掘調査の積み重ねが、弥生から古墳時代への移行期の社会や環境を復元する手がかりとなり、それにより描かれた歴史が私たちにとってはかけがえのない知的財産となることを安藤先生は熱く語られた。講義の後半には、太平洋戦争末期に旧帝国海軍連合艦隊司令部等が置かれた日吉台地下壕の概要と近年の発掘調査の成果についてお話し頂き、校舎を出て宿舎跡や塹壕施設などを見学した後、谷奥部の出入口より地下壕内へと潜入した。

日吉台全域に広がる地下壕は大きく5カ所に分かれるが、その中でも中心的施設となる連合艦隊司令部地下壕は、太平洋戦争末期に建設されたとはいえかなり高度な技術と高価な資材が用いられており、戦後70年を目前とする現在でもその本体施設は建設当時のまま現存している。神風特攻隊や戦艦大和の菊水作戦など、終戦間近の海軍に関わる多くの作戦指令が行われた場所である。近年調査された航空本部地下壕の出入口施設は壊れやすい構造であるのに対し、連合艦隊地下壕出入口施設は分厚いコンクリートによって守られている。同じ地下壕でも使用する部隊やその任務により造り分けられていたことが判明するなど、「発掘調査が進むにつれて、従来の認識を覆す発見がこれからも多く出てくるはず」とのことであっ



地下壕通信室

た。また、戦後70年を過ぎれば当時ここで勤務していた人の話を聞くことが不可能になるばかりでなく、戦後その聞き取り調査をしていた研究者の話すらも聞けなくなってしまう。安藤先生のお話からは、淡々と事実を紹介しながらも、その危機感をもって熱く研究にあたられていることが伺えた。

科学的な発掘調査により遺物・遺跡から連合艦隊司令長官や海軍幹部、通信兵たちの行動の様子を明らかにする。聞き取り調査や文献記録の収集により、実際に終戦間近の戦局を分析し、多くの若者たちの死に直面した彼らの思いについて推し量る。この多角的なアプローチにより、悲惨な戦争を繰り返さない知恵を導き出す重要な歴史遺産を残してゆく。こうした安藤先生の研究姿勢に感銘を受け、今回の踏査も無事に終了となった。

(市立川崎総合科学高校 阿部 功嗣)

お知らせ

部会報第71号でもご案内しました歴史分科会の海外史跡踏査(2013年8月中国東北部方面)は、取扱旅行会社倒産のため、実施を見送ることとなりました。

次回の海外史跡踏査は3年後の予定です。踏査地・日程等リクエストがございましたら、海外史跡踏査委員会またはお近くの歴史分科会スタッフまでお声掛けください。

地理分科会活動報告

企画委員会

【1】地理研究発表会

2012年度の地理研究発表会は3月6日(水)に、県立かながわ労働プラザで行われた。34名の方に参加していただき、シンポジウム・講演会が進められた。

平成25年度から高等学校でも全教科で新学習指導要領が施行される。各教科・科目ともこれまでのゆとり教育が見直され、地理でも教科書の総ページ数が増え、学習内容も詳しくなっている。そこで地理Aでの「東・南・東南アジアの生活・文化の取り扱い ～新学習指導要領を受けて～」というテーマを設定した。



今年度のパネリストは、それぞれの学校現場で意欲的に取り組んでおられる若手の先生方をお迎えした。まず川崎市立川崎高校定時制の布山 明先生に「新学習指導要領における東アジアの扱い方について」というテーマで、中国を中心に自然環境・漢民族と少数民族・経済発展・日本との関係などについて歴史授業との連携も含めて発表していただいた。次に川崎市立商業高校定時制の會田洋一先生に「南アジアについて ～インドだけでなく～」というテーマで、バングラデシュを中心にインドとの宗教・民族の違いや歴史を認識し、南アジア地域の多様性を理解する授業実践について発表していただいた。最後に光陵高校の土谷優子先生に「東南アジアの生活と文化の取り扱いについて」というテーマで、料理や食文化を取り上げながら興味・関心を持たせ、地形や気候、農業・歴史・宗教、旧宗主国の影響などの理解を深める授業実践を発表していただいた。3人の先生方の発表はいずれも、新学習指導要領の内容にある世界の生活・文化の多様性の理解や、異文化を理解し尊重することの重要性を考察させるために役に立つ実践的な内容であった。

後半は、文部科学省初等中等教育局教科調査官の濱野 清氏をお迎えして、『地誌学習をいかに進めるか ～改訂学習指導要領の概要と「地誌」指導のポイント～』というテーマで講演が行われた。特に言語活動としての読図や作図、資料活用の重視と、動態地誌的な地誌学習についての説明は大変参考になるものであった。

【2】地理紀要30号

今年度は「世界を見る」2本、教材紹介2本、夏季・秋季の野外調査報告2本、委員会報告2本を掲載した。校務多忙のなかでご執筆いただいた教

材紹介や報告です。ぜひご一読ください。

(県立七里ガ浜高校 中島 功)

教材委員会

教材委員会では、副教材として新地理演習帳とトライ地理20の2つを帝国書院より発行している。

活動としては、委員全員で改訂項目を確認、担当を分担し、次回委員会までにそれぞれが個人の持ち帰りで、職場や自宅での作業が中心である。大改訂がないかぎり他の委員会に比べると活動回数は少なく、全体で集まるのはここ数年間2～3回程度の活動である。そのうち1回は夏季休業中の1日を使って、分担したものを持ち寄って委員全体で確認したのち、帝国書院に校正をお願いすることにしている。それ以降は、帝国書院と個人との連絡調整でほぼ完成される。

今年度は新地理演習帳の見直しと統計の更新を行った。新地理演習帳は地理B対応で、世界全体をほぼ網羅している充実した内容である。新カリキュラムになっても現行のものでも対応できると考え、図表の統計資料を最新のものに更新したのと、災害の部分で、地形図での作業を加えた。ここ数年は地理を必修とする学校も減少し、残念ながら演習帳およびトライ地理20の採用も減っている状況にある。ぜひ採用を検討していただきたいのと、改善点などご意見をいただけるとありがたいです。

(県立相模原中等教育学校 山本 敦)

野外調査委員会

好天の12月6日(木)の午後、22名の参加をいただいで厚木・海老名の商業地の現状と今後を主題として野外調査を実施した。

厚木市中心商店街は国道沿いや周辺部の大型店舗等や他市に買い物客が流れて衰退し、厚木市でも「商業にぎわい課」を設置する等、賑わいを取り戻すのに苦心している。最初に厚木市商店会連合会事務局で金森会長、前田副会長より質疑応答形式で厚木の商業に関するお話を伺った。

次に、昭和40年代までは中心商店街であった天王町、東町の現状を見て回った。東町はアーケードの老朽化に伴い、経済産業省の補助金を利用して撤去した。そして「小江戸」と称されたことに

ちなみ、店のシャッターに江戸の風情をイメージした絵を描く取り組みをした。付近にはマンションもあるが、当日は残念ながら開いている店はほとんどなく、厳しい現状をみた。その後、厚木市が旧パルコを三菱地所から取得し、中心部の公共施設を集約し、商業施設を入れて整備する「あつぎ元気館」や駅から少し離れると駐車場が目立つ一番街商店街等の現状を見て本厚木駅へ戻った。

後半は海老名へ移動して、駅東口直近の商業施設として2002年に開業した「ビナウォーク」（小田急が建設したショッピングモール。丸井その他多数のテナントが入る）を自由見学した後、駐車場や水田が広がるJR相模線の西側にある土地区画整理組合事務所で、土地区画整理事業についての説明と事業完成時の姿について話を伺った。

西口区画整理はおよそ30年前に話が持ち上がったとのことである。小田急と相鉄の駅が1973年に現在地に移転して西口ができ、さらに1987年3月、民営化直前に国鉄の海老名駅が新設されるが、国鉄の新駅設置計画が出た頃から動きが始まったものであろう。数年前から事業化にむけての動きが活発になり、2012年12月に事業開始となった。駅隣接地でこれだけの規模の区画整理は県内に他にはないとのことである。90名の地主が組合を作り14haの土地に商業施設、住宅地域を設けるもので、商業施設には三井不動産の提案を受け入れることが決定し、「ららぽーと」が進出すると言われており、3年後の完成をめざしている。

海老名駅西口の景観の変化や新商業施設が生み出す影響、そして厚木の中心地の賑わいが戻るのか、今後の動向を注視していきたい。

最後に、見学と説明を快く引き受けていただいた厚木市商店会連合会と海老名駅西口区画整理組合の皆様へ深く感謝します。

(県立厚木清南高校 小泉 正幸)

テスト委員会

当委員会は、11月実施の「県下一斉テスト」と4月実施の「新入生テスト」地理的分野の作成をおもな業務としている。

今年度も4月に出题方針と分担を決定し、作問を開始した。このうち、「県下一斉テスト」は8回の会議で問題の検討を行い、9月上旬に入稿、

10月初めに校了した。そして、「新入生テスト」の検討が始まるというところで、従来の二つのテストは2012年度で最後となることがわかった。

この件に関する詳細は別に報告があると思われるが、地理分科会では引き続きテスト問題の作成を行っていくことになった。ただし、それが無償で提供されること以外、どのようなものになるかは現在のところ未定である。

さて、2013年は新入学生より新しい学習指導要領が実施される年である。これに対応し、各学校での授業に活かせるテストはどのようなものなのか、これからの委員会を通じ検討していきたい。

なお、毎年のことですが、『地理紀要』には「県下一斉テスト」全問題と解答・解説が掲載されています。ご覧いただき、テストのありかたや問題に対するご意見をいただければ幸いです。

(県立厚木高校 磯崎 厚)

地域研究委員会

地域研究委員会では、2010年の、「変わりゆく神奈川県」発刊後も、引き続き神奈川県内の変化をとらえるため、日々研究を続けている。その成果は、ホームページ上で公開しているが、委員会のメンバーの多忙と、メンバーそのものの減少もあって更新はやや苦戦している状況である。

このような中であって、2012年度は夏季に、相模向陽館を起点にした巡検を実施した。主に、アメリカ海軍厚木基地とその周辺を見学し、綾瀬市や座間市における基地の現状、また周辺地域の開発状況等を見学した。特に厚木基地内は、元航空自衛官の方にご案内いただき、基地の歴史や役割など詳しく伺うことが出来た。

この他に、委員会を実施した際にも、二宮高校周辺での変化を比佐先生よりレクチャーを受けるなど、あらゆる機会を得て地域の研究を実施している。今後は、月に1回ホームページの更新を目標に、地域研究委員会のメンバー以外の協力も得て、何とか維持できればと思う。

(県立鶴嶺高校 井上 達也)

コンピュータ委員会 <http://www.kana-chiri.org/>

コンピュータ委員会はHPによる地理分科会の情報発信・地理教の情報材共有化など行っている。

地域研究委員会が更新している「変わりゆく神奈川」が充実した内容になっている。地理分科会の活動報告として「社会科部会報」を掲載した。

野外調査の案内なども掲載していく予定である。

(県立茅ヶ崎西浜高校 新井 隆)



海外研修委員会

2014年夏の地理分科会海外研修に向けて企画の検討を開始した。2008年は中国長江下流域、2011年はロシア沿海州をいずれも20名近くの参加者と巡った。

前回、前々回と安・近・短をコンセプトに、発展著しい地域をテーマに企画した。今回も安・近・短を目指しつつ、教材として授業に活用できる地域を選び、より多くの方々にご参加いただけるように計画していきたい。秋季大会でお知らせできるように企画準備中である。2012年度は、ロシア研修で得られた材料をもとに、委員各々が教材を作成して授業を実践し、その授業案を地理紀要に報告した。

(公文国際学園高等部 中村 洋介)

倫政現社分科会活動報告

平成24年度 東京巡検 報告

2013年3月8日(金)に倫理・政経・現代社会分科会の事業「東京巡検および講演会」が行われた。今年度は、午前中に霞ヶ関の「東京地方検察庁」を、午後には「東京証券取引所」を訪ねた。いずれも倫理・現社・政経の授業に深く関わるも



のであり、22名の参加があった。

午前中の「東京地方検察庁」では、まずはじめに検察庁の仕組みを説明していただき、続いて操作から取り調べに至る流れ、警察機関による逮捕、告訴、告発の違いについての説明があった。手錠は取り調べの時にははずしているといったエピソード等も交えながら話しは進められた。

後半になると、裁判員制度について、導入の目的や仕組みについて説明があり、DVDによる模擬裁判の例を見ながら説明を受けた。その際に、法教育とは法的なものの考え方を伝えるものであり、「自分の意見を言うことができるか」「理由を根拠を挙げて述べることができるか」「人の言う内容を聞くことができるか」「班としての意見をまとめることができるか」というところがポイントになるとのお話があった。講義に続いて、模擬取調室を見ながら質疑応答をした。



午後は、場所を茅場町に移して日本最大の金融商品取引所である東京証券取引所を訪れた。

概要説明を受けた後に、東証アローズの見学にうつった。上場企業の株式をすべて買うために必要な金額は約353兆円必要だということや、一万円札で1兆円分地面から積み上げると、どのくらいの高さになるのかといったお話をいただきながら取引所の中を一通り案内していただいた。ちなみに1兆円分の一万円札を地面から積み重ねると、その高さは約一万メートルになり、飛行機が飛んでいる高さとはほぼ同じだそうである。

その後、マーケットエクスペリエンスコーナー(株式投資体験コーナー)にて約30分ほど株式投資の体験を行った。一人ひとりの教師がコンピュータ端末の前に座って取引を行いながら、株式投資の仕組みを知るといったものである。



続いて東京証券取引所の榊原宏司先生から「証券市場の機能と役割 最近の動向」と題してご講義をいただいた。榊原先生は同取引所でCSRをご担当しながら、上智大学と慶應義塾大学で講師もつとめられている。マーケットの最先端と学問の世界の接続を感じさせるお話であった。

以上が、今年度の東京巡検の概要である。私たちの授業力向上に多大なる力をいただいた東京地方検察庁と東京証券取引所の皆様に心から御礼を申し上げたい。また年度末のお忙しい中、よりよい授業づくりを目指してご参加いただきました諸先生方に感謝申し上げます。次年度も魅力ある研修内容を検討していきたいと考えている。

(県立平塚農業高校初声分校 金子 幹夫)

テスト委員会 活動報告

県下一斉テストの実施月を11月としましたが、事前のご案内が不十分であったり、県下一斉テストの意義が十分に理解されないなど、多くの問題点を残すこととなりました。次年度は、テスト委員会のあり方から抜本的に検討する予定です。

教材委員会 活動報告

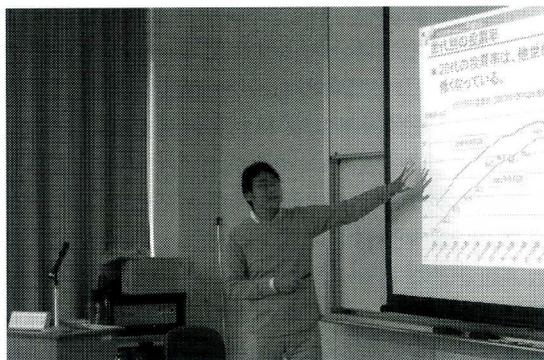
過去に作成した教材の手直しをしています。今年は新課程導入の年、アイデアを持ちの方はお気軽に教材委員まで声をかけてください。

研究委員会 活動報告

第1回、8月20日に授業研究と10月の秋季大会における報告内容の選定を実施しました。第2回は3月27日「シティズンシップ教育の更なる深化と展開を目指して」のテーマのもと、講演、研究発表、提案等、活発な意見交換が行われました。

2012年度倫政分科会研究発表会報告

3月27日午後、横浜市立横浜サイエンスフロンティア高校において、倫政分科会の2012年度春季研究発表会が行われた。全国公民科社会科教育研究会「授業研究委員会」研究発表会との共催になって広く声をかけたことやシティズンシップ教育への関心の高まりの中で、県内外の高校教員のほかにも弁護士や教育学部の学生・大学院生なども加わり、参加者は40名を超え、盛況であった。



テーマ：「シティズンシップ教育の更なる深化と展開を目指して」

(1) 講演：特定非営利法人Rights副代表
小林 庸平氏

「イギリスとスウェーデンのシティズンシップ教育 ～両国の視察を終えて～」

講師は、大学1年の18歳のとき、仲間と一緒に子どもや若者の政治・社会参加を推進する団体Rightsを立ち上げて活動を続けて、今31歳。経産省の研究所で経済分析をされている専門家でもある。講師も参加し、Rightsではイギリスとスウェーデンのシティズンシップ教育の視察を行った。

いま日本の若者たちの政治参加を取り巻く状況はどうだろうか。人口の少子高齢化が進む中で若者たちの声が相対的に小さくなってきている。日本の抱える国債は、いずれ今の若者たちが税金で返していかなければならない。個人と政府の間の受益と負担をめぐって世代間格差は開いており、70歳以上に比べ20歳未満の将来世代は1億1千万円余り損をする計算になる。また新しく労働市場に参入してくる若年層の非正規雇用比率は他の世代より上昇している。しかし、世代別の投票率を見ると20歳代は最も低く、投票総数でも30歳代以下は25%しか占めない。

イギリスやスウェーデンに比べて、どうしてこんなに日本の若者の投票率が低いのか。それは、若者たちに「あなたは、社会を自分の力で変えられると思いますか」と聞くと、「そう思う」「ややそう思う」がイギリスやスウェーデンは7割を超すが、日本は25%であることに関係あるであろう。スウェーデンでは若者の7割は投票に行き、10代の国会議員すら現れている。

イギリスでは、1997年ブレア政権のときにシティズンシップ教育が開始された。イギリスでも若年層の投票率の低下傾向が見られていた。著名な政治学者クリックを座長とする委員会は「活動的シティズンシップ」を掲げて、社会的・道徳的責任の涵養、共同体への参画、政治的リテラシーの育成を目ざした。教育カリキュラムに組み入れられ、その結果、若者の政治・社会参加は増え、彼らの投票率も若干上昇してきている。

スウェーデンでは、シティズンシップという科目はないものの、選挙に合わせて学校では各党の責任者を呼んで政策を聞き、話し合い、模擬投票を行っている。結果は全国で集計されて公表される。また、何より自分たちが生活する場が民主的に運営されていることが重要だと考えられ、学校の最高意思決定機関である学校評議会には、校長、教師、保護者の外に、生徒代表が加わることになっている。生徒は発達年齢に応じて民主的決

定プロセスについて実地に訓練を積んでいくのである。

日本では、まだまだ現実の政治や子どもの意思決定を教育の場に持ち込むことに抵抗感は強い。しかし、シティズンシップ教育をイギリスやスウェーデンなど先進モデルを参考にしながら、一步一步進めていくなかで日本の希望は見えてこよう。

(1) 研究発表

①慶應大学教職課程センター講師 太田 正行氏

「新科目『市民生活と法』（仮称）を開発する」

発表者が東京都立高校に勤務していたときに立ち上げた東京都高等学校法教育研究会の活動紹介。

②慶應大学学生VITA+

「地域の問題を学校設定科目アントレプレナーシップで教材化する」

大学生たちがTTで入る県立上鶴間高校の授業で取り上げた、生徒が大人たちと一緒に地域の祭りを課題解決しながら運営したことの報告。

③提案：ヤフー株式会社 白石 久也氏

「Yahoo!みんなの政治『若者と一緒に取り組みたいこと』」

若者たちにも自分ごととして考えられる地域政治参加のネット発信を提案。

(県立上鶴間高校 落合 隆)

計 報

2013年1月2日 社会科部会第14代部会長の角田新之助氏をご逝去されました。享年81歳でした。謹んで、角田先生のご冥福をお祈り申し上げます。